

「教職実践演習」のねらいの再確認と課題の明確化

教育心理学・江上園子

1. FD シンポジウムの内容

2015年度の愛媛大学教育学部FDシンポジウムでは、2010年度入学性から新設された「教職実践演習」についての発表が3名の先生から行われた。

山崎哲司先生からは、「他大学の状況と教職実践演習の意義」という内容のお話をうかがった。このお話によって、他大学ではどのようにこの授業を展開しているのかが理解でき、そしてそもそもこの授業の意義についての再確認もできた。科目のねらいとしては「教員として最小限必要な資質能力」「学びの軌跡の集大成」「教員になるうえでの自己の課題を自覚」「教職生活を円滑にスタートする」ということなどが挙げられている。そのために、これまでのポートフォリオの確認やまとめのテスト、模擬授業やロールプレイングなどが行われていることが確認できた。また、教員主導型の授業ではなく、学生主導の授業であることの重要性についても理解できた。

池野修先生からは、これまでの本学での取り組みの前提、流れやその実態、評価方法など、実践的な話に多く触れることができた。その中で、本授業は「教員免許状の質の保証」であり「出口チェック」であるということがキーワードとして自分の中に浸透した。本大学としての特徴のひとつである「リフレクション・デイ」についても設けることによる効果として、教職へ意欲のある者を絞っているということを聴き、本学は教職志望者の選定としてかなり多くの時間を割き策も講じていることが改めて確認できた。お話の最後には「質保証に対応した内容になっているか」「簡素化できる部分はないか」「担当者をどうするか」「得られたデータをどのように教職課程の改善に活かしていくか」ということが挙げられ、授業担当個人ではなく本授業にかかわるすべての教員としての課題を明確化して下さったことがありがたかった。

小田哲志先生からは「教職実践演習からみた学生の姿」というタイトルで、大学教員、

学校現場の先生方からの実際のご意見を取り上げながらのお話をうかがった。先生ご自身が本授業第3回をどのように行ったかということをお話し下さったが、事前にかんがりの準備をされていた姿が印象的で反省させられた。また、現在の教育界全体における課題としてご教示下さったこととして「特別支援教育力」「発達に関する知識の理解」などを挙げられていて、それは自分も大学教員として想定しているところであったので、これらの課題に対する意欲がさらに高まった。また、現場の先生たちから求められる人間像として「コミュニケーション力」「コーディネート力」の高い人材が述べられていたことにも納得した。

2. 重要である点・参考になった点

本シンポジウムを聴講してとくに重要であると感じた点、参考にしたいと思っている点は以下の2点である。

1点目としては、本授業のねらいの理解・確認ができたことが挙げられる。本授業の「教職」部分を2年間担当して感じるのだが、自分はい、他の科目と同じように、何か学生の「役に立つこと」「知識となりうること」を伝えてしまいそうになることがある。また、学生の側からも、自分たちの発表の後にこちらのコメントを求めてくるような姿勢もある。しかし本授業のねらいに立ち返ると、これはあまり適さない。来年度以降は「学生の自己課題の明確化」「教員免許状の質の保証」ということを念頭に、より学生主導型の授業となりうるよう、努める。

2点目として、教育現場から求められている人間像が明確になったことが挙げられる。従来、学校現場の教員として求められる能力や素質などはかなり多くのものが明らかになっているが、本シンポジウムの中では「交渉能力」というキーワードがもっとも多く挙げられたということであった。学校は「子どもたちの社会化の場」とあるということからも、子どもたちに単に各科目の知識を吸収させたり問題の回答方法を理解させたりすることで

はないことは明白である。そのためにも、そのモデルとなる教員が十分に「社会性のある」人材であることが肝要であるということが腑に落ちた。なお、このような能力は子どもたちとの信頼関係のためだけに必要なのではなく、教員間の協働や保護者との関係形成、他機関との連携などすべての面においてその機能を果たしていくであろうということでも興味深い。このことを踏まえ、来年度以降は学生にその重要性を伝えるとともに、この授業でそのような力をおのおのの学生が自分のやり方で少しでも発揮できる場としたい。

3. 課題として捉えた点

本シンポジウムに参加したことで、本授業を担当する教員のひとりとして本授業の課題ならびに自分なりの課題も見えつつある。以下にそれぞれ具体的に述べていく。

本授業の課題としては、取り上げる事例の少なさである。本授業を「出口チェック」として捉えるならば、講話やそれについての感想や意見を求めた課題を課すよりも、実際に現場でどのような問題が生じ、どのように対応をしているのかということを経験の学生同士で考えさせ、そして最後にあくまで1例として、どのように解決したかということを経験の先生から挙げていただくという機会があっても良いと考える。教職にかかわる授業を持っている立場としてよく痛感していることが、教育現場にかかわる事例を授業で取り上げた際の、学生と現職教員院生の反応の違いである。学生から見ると「理解しがたい問題」や「自分とは無関係の世界の話」でも、実際に教育現場では日常茶飯事であるということである。その乖離を、学生時代から少しずつ埋めていけないだろうか。そのためにも、本授業のようにひとつの事例を取り上げるだけでなく、いくつか取り上げ、あるいは同時に何例かの事例を挙げ、その中から学生に選択させてグループ討議させるなども必要ではないだろうか。

最後に、本授業を担当する自分の課題を挙げる。本授業の構成員としては、「教員として最小限必要な資質能力」が育成されているか見極める目も必要である。しかし、自分にはまだその目が備わっていないと痛感している。自分自身がその「見極める目や力」を獲得するためには、やはり教育現場との協働や教員としての経験がより多く必要になってくる。

これらのことを念頭に、来年度はこれまでよりも本授業を意味のあるものとしていきたい。

最後に、本シンポジウムでこのようにいろいろと考察することができたのも、ご登壇いただいた3名の先生方の御蔭である。記して感謝の意を捧げたい。